

1 動物介在教育とは何か——「命」を教える

7

はじめに——せんせい、うさぎのしっぽがとれちゃった 1

1 いま子どもたちに起こっていること——「また買ってあげればいいじゃん」

8

命はリセットできない 8

園における飼育動物の死に関するアンケート調査
とまどう保育者たちに対するアドバイス 11

2 動物を通じた教育の歩み

25

日本の幼稚園における動物飼育のはじまり
戦後の動物飼育の変遷 28

いま幼稚園で飼育されている動物たち
日本の家庭でのペット飼育の動向と園児の保護者の期待 31

3 動物介在教育とは何か

35

動物介在教育とアニマル・セラピー
命の環 38

命と私たちの食べ物
こころの窓 40

4 動物が教えてくれること——動物の不思議な力

47

子どものこころを癒し、育てる動物の力
動物を通して幼児期に育てたい「愛するこころ」
動物から学ぶ「バイオフィリア」の能力 47

動物の飼育と子どもの社会性の発達 48

51

2 動物介在教育を導入するために——三つのまなざし 動物、子ども、先生

1 動物介在教育を導入するために 56

- 動物のまなざし 56
- 先生のまなざし 57
- 教育目標を設定する 61
- ウサギの飼育についての五〇の質問(自己診断テスト) 62
- 動物を導入する前に考えておきたい一四項目 67
- 子どもたちと動物のお約束、八つの基本ルール 72

2 動物飼育を見直す 75

- 動物福祉の視点から 75
- 日本における動物の福祉 77
- それぞれの動物に適した環境の作り方 79
- 飼育動物の繁殖 82
- 飼育動物の病気と怪我 84
- 飼育動物(ウサギ)の福祉に関する自己点検 85
- 飼育動物から子どもに感染する病気への予防対策 86

3 飼育動物の死 93

- 飼育動物の死が子どもに与える影響 93
- 死を受け止め方 96
- 死を伝えるための言葉 99
- メント・モリ 101

4 困った時の対処法 103

- 子どもは動物好きとは限らない 103
- 動物をいじめる子 105
- 動物が苦手な保育者のために 107

第 3 章

3 動物介在教育の課題と可能性―何が問題で、何ができるのか

143

1 残された課題とは

144

動物飼育は園にとつて必要不可欠なものなのか

146

経験主義の落とし穴

149

動物は魔法の杖ではない

150

先生の意識が変化し、理想的な動物飼育に変わった幼稚園

151

2 広がりを見せる動物介在教育とその効果

156

ペットによる介在教育

156

訪問する動物による介在教育―動物ふれあい教室など

159

イヌの訓練を通じた更生プログラム

167

野生動物を通じた教育プログラム

169

動物園の動物による介在教育

171

3 家畜を通じた教育プログラム―食育と食農教育

177

食育と食農教育の必要性

177

家畜を飼育している農場での体験を通じた食農教育

181

広島大学の農場における食農教育の取り組み

183

農場ガイドツアーと子どもたちの反応

186

農場ガイドツアーを通して子どもたちが感じること

189

おすすめの本の紹介

192

参考文献

あとがき

206 200

ブックデザイン…熊澤正人十尾形忍（ハワーハウス）
カバー…本文のイラストと写真…谷田創

はじめに——せんせい、うさぎのしっぽがとれちゃった

日本の幼稚園や保育園の多くは、園児の情操教育のために古くから園庭の飼育小屋や教室の中で小動物を飼育してきました。一般的に園内で生き物を飼育することを積極的に奨励していない欧米の園と比較すると、このような環境は特殊であるといっても過言ではありません。私が以前訪問したカナダの幼稚園では、金魚を含めて生き物は一切飼育されていませんでした。その理由を保育者に尋ねると、飼育動物と関わった園児が病気や怪我をした場合に訴訟になる可能性があるからと即答されました。金魚でさえも、水槽が割れて園児が怪我をする可能性がないわけではないからとのことでした。

もちろん訴訟に対する心配だけではなく、その背景には「そもそも保育者は動物の専門家ではないので、動物の健康と命に対し責任を持つて保障することができない。動物を不幸にしてしまうのではないか」という根本的な理由がありました。日本では多くの園でウサギやニワトリが飼育されていることを保育者に説明すると、反対に驚かれています。日本の保育者は子どもだけでなく、動物についてもスペシャリスト（専門家）なのかと真剣な顔をして聞かれました。

近年は日本でも、幼児を対象とした「動物介在教育」が注目されるようになってき

ました。私は、「動物介在教育」とは、幼児が動物と関わったり世話をしたりすること、自分よりも弱い立場にいるものに対しての思いやりのこころを育むとともに、生命に対する尊敬の念を持たせ、自分の周りの自然環境に対しても配慮できる人間を育てる教育のことであると考えています。「動物介在教育」には、園の飼育動物を通して教育だけでなく、乗馬を介した教育や、イヌによる訪問活動、家畜を介した食農（食育）教育なども含まれます。

欧米の家庭では、一九世紀以降からイヌやネコなどのペットを飼育することが一般化してきましたので、「動物介在教育」については園よりも家庭での役割が重要となっています。ところが日本では、幼児のいる家庭のペット飼育率が低く、また日常生活で身近な自然が少なくなりつつあることから、生き物を通じた教育という面において、幼稚園や保育園の担う役割は今後さらに重要となると思われます。

しかしながら、日本の園で飼育されている動物の境遇は、望ましいものであるとは言いがたい現状にあります。

例えば、私たちがこれまでに関わったある幼稚園でこんなエピソードがありました。

入園当初からウサギが大好きな年少の女の子、Aちゃんのお話です。

いつも幼稚園に來ると先生と一緒に飼育小屋の外からウサギに餌をやり、「かわいいね」と声をあげます。また、年長・年中児がウサギ当番で飼育小屋に入っていると、自分も同じように小屋に入って、ウサギを抱っこしたがりです。

ある日の朝のことです。登園するとすぐにウサギ小屋に行ったAちゃんは、しばらくすると何ともいえない顔つきで保育室に戻ってきました。その後ろから年長児の担任の先生が、ウサギの尻尾をそっと持ってきました。周りにいた他の先生たちも啞然とした様子です。Aちゃんの担任の先生は何があったのかすぐには理解できませんでしたが、とにかくAちゃんをしっかりと抱きとめました。

事の真相は次のとおりです。Aちゃんは小屋に入っていつものようにウサギを抱っこしようとしていました。ところがウサギはAちゃんが近づくとすぐに逃げてしまいます。Aちゃんはどうしてもウサギを抱っこしたかったので、逃げるウサギを追いかけて小屋の中を走り回りましたが捕まりません。

ようやく、穴に逃げ込もうとした一匹のウサギをつかんで、自分の方に引き寄せようとしたところ、つかんでいた尻尾がちぎれてしまったのです。しかしAちゃんは事の重大さに気づいた様子はありません。

飼育当番のために小屋にいた年長児の担任の先生が、そのウサギを見て「あっ！」と大きな声をあげた瞬間にAちゃんはわれに返ったようでした。ただ、ウサギの尻尾がちぎれたことよりも、むしろ先生の大きな声と驚いた顔にショックを受けているように見えました。

幼稚園の先生たちは、ちぎれた尻尾を持って大急ぎで近くの動物病院へウサギを連れて行きました。取れてしまった尻尾を縫い付けることはできず、傷口を縫って戻らないうちに帰ってきました。Aちゃんも、その頃には落ち着

きを取り戻したようだったので、担任の先生と飼育小屋までウサギを見に行くことにしました。

「私の家にも(ぬいぐるみの)ウサギさんがいっぱいいるよ。フワフワしてとつても気持ちいいんだよ」と嬉しそうに話し、尻尾のちぎれたウサギを気づかう様子はまったく見られません。

そこで先生は「このウサギさんはぬいぐるみのウサギさんとは違うんだよ。だから尻尾が取れてしまつて、痛くて痛くてたまらなかつたんだよ」と真剣に話しました。熱心に説明する先生の姿を見て、Aちゃんは全身で事の重大さを受け止め、ポロポロと涙をこぼし始めました。

その日の降園時に、Aちゃんは迎えに来たお母さんに自分から今日起こつたことについて説明しました。またその夜には勤めから帰つて来たお父さんにもこの出来事を話したそうです。その後の連休には、家族全員(父親、母親、小二の姉、Aちゃん)で幼稚園にやつてきて、ウサギに餌を与え、飼育小屋の掃除をしました。

このエピソードは、二つの重要なことを私たちに伝えています。

一つ目は、子どもたちだけで動物と関わらせてはいけないということです。必ず先生が側に付き添っていることが必要です。子どもたちは動物の扱い方についてほとんど何も知らないということを前提にしてください。二つ目は、動物の立場に立った先生の言葉かけが必要であることです。先生は動物の代弁者でなければなりません。

つまり、動物との関わりを通した子どもへの教育は、「動物のいる環境」を子どもたちに与えるだけでは不十分であり、何よりも、周囲の大人（保育者や保護者など）の動物に対する言動・態度・行動が非常に大きな影響力を与えているのです。幼児が自分の置かれた状況や自分の行動の善し悪しを判断する場合に、大人の姿勢と言動が重要なロールモデルとなります。大人は、子どもの模倣の対象となっているという自覚を常日頃から持つて子どもと接することが「動物介在教育」にとっては最も重要なことなのです。

そこで本書は、幼稚園や保育園、小学校の先生に、動物飼育において子どもたちのロールモデルになっていただくことを願って執筆しました。そのために、先生の動物に対する意識を変えることを本書の目的の一つとしています。さらに、先生の動物に関する知識を高めていただくことも目的としています。本書は、ウサギやモルモットなどそれぞれの動物を飼育するための専門書あるいはマニュアル書ではありませんので、各動物の生態や飼育法についての詳しい説明はしていません。むしろ、動物を飼育するにあたって、共通して必要であると思われる意識と知識を紹介しています。先生方がこれまで抱いておられた動物に対する見方を一度捨てていただき、新しい目で本書を読んでいただければ幸いです。

本書はお一人で読まれてもよいのですが、その内容について同僚の先生方とお話をしていただければ、動物飼育や動物を通した教育で何を目指すのかなどについての共通理解が深まると思います。本書の内容を話し合うことで、飼育動物の新たな側面に

気づかれることもあるかもしれませんが。さらに本書を使って、子どもたちにも動物の
ことについて話しかけてください。きっと子どもたちの新たな声が聞こえることでし
ょう。また、それぞれの章には、私たちの関わった幼稚園の動物飼育にまつわるエピ
ソードを紹介していますので、先生の園や学校の状況と照らし合わせて読んでいただ
くことで、問題点が明らかになるのではないのでしょうか。

また、これから幼稚園や保育園の保育者となるために教育系の大学で勉強をしてい
る学生さんにぜひ本書を読んでいただきたいです。幼児教育や保育の授業などで参考
書として使っていたことで、卒業後、新しく幼稚園や保育園に赴任した時にも飼
育動物との関わりで躊躇することはなくなると思います。

ただし、先ほども述べたように本書はマニュアル本ではありませんので、この内容
をそのまま幼稚園や保育園の状況に当てはめるのではなく、あくまでも参考として取
り入れていただければ幸いです。

世界の各地では戦争が絶えることなく続き、大人だけでなく多くの子どもたちが亡くなっています。また食料不足による餓死者は一日あたり一〇万人にのぼるとも言われています。一方、日本では毎年三万人の自殺者を数え、減少の兆しは見られません。

このように、「死」が常態化した時代において、「命」の重さ、「命」の大切さを子どもたちに「教える」のは容易なことではありません。さらには、この「死」の常態化は、どちらかという

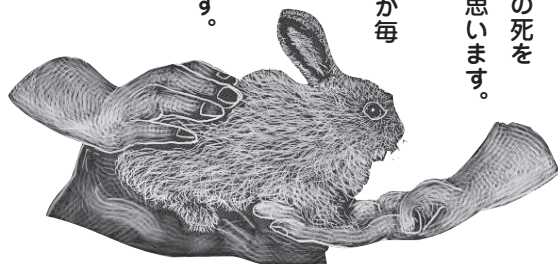
と遠い世界の出来事のように、肌には直接ふれるような実感はありません。
私が子どもの頃には死がより身近にありました。祖父・祖母の老化とその死を近くにしながら、子どもごころにも「命」の儚さを肌で感じていたように思います。また、人は病院でよりも自宅で亡くなるものだと思っていました。

しかし今の時代は、テレビやネットを通して戦争による犠牲者や自殺者が毎日のように報道される一方で、身近な死というものが日常から隠蔽される傾向にあり、「命」の重みが子どもたちになかなか通じなくなってきているのではないのでしょうか。

動物介在教育の役割はこのような時代だからこそ、重要なのだと思います。

動物介在教育とは何か

—「命」を教える



1 つま子どもたち「起っつっつるんや」

—「また買っつければいいじゃ？」

命はリセットできない

科学技術の発達とともに、出生前診断が可能となり、その結果にもとづいて堕胎をするかしないかの判断をすることもできるようになりました。また、臓器移植による治療や延命も可能になってきましたが、その臓器提供者の脳死判定については賛否両論があります。

このように、現代社会における生と死の関係、命の意味、生きることの意味はこれまで以上に複雑化し混沌としています。生き物を園で飼育し、その生き物が死んだ姿を子どもたちに見せることで「命の教育」になるというような単純なことではないのは明らかです。そこで、幼稚園において飼育動物が死んだエピソードにもとづいて、飼育動物を通した生と死の教育について少し考えてみたいと思います。

幼稚園で飼育している生き物が死んだ場合、それを見た子どもたちがまったく何も感じないということは、何かを感じただろうと推測するだけに留まらず、子どもたちがその死をどのように感じたのか、また、何も感じなかったように思われるのであれば、なぜ何も感じなかったのだろうかということをお省みることが重要です。

ここで、私たちが関わっていたある園でのエピソードを二つご紹介します。いずれも年長児のクラスで飼育していたハムスターが死んでしまった時の保育者と子どもたちのエピソードです。

エピソード①

月曜日の朝、九月にもらった二匹のハムスターが死んでしまいました。なぜ二匹が一緒に死んでいたのか原因もわからず、先生自身もショックを受けましたが、子どもたちと一緒に、「どうして

だろうね」「悲しいね」と話をしました。「ハムちゃん冷たくなってる。いつもはあったかいのに」「でも少し目が開いてるから眠ってるだけなんじゃない?」「餌が足りなかったんじゃない?」「ぼく、お当番でちゃんと小屋に入れたもん」「他のクラスのハムスターは水を飲んでるから、水がなかったからじゃない?」「何か変なもの食べたんじゃない?」という子どもたちや「涙が出そう」という子もいました。「いつも遊ばせてもらっていたのだから、最後のお別れをしよう」と、冷たくなったハムスターたちに一人ずつ触れ、最後の挨拶をしました。「死んでしまったら、生き返らないんだよ」と話をする、「死」というものが、まだピンとこない様子できょとんとしている子どもたちもいました。

中には、「ハムちゃんが死んじゃった! 見て! 見て!」とハムスターの死骸をあちこちに見せて歩いたり、半ば好奇心で「ハムちゃんに触らせて!」と押し合いになったり、おもしろがったりするような姿も見られました。

ハムスターの死の翌日、家で大切に飼っていたハムスターを持ってきてくれた子どもがいました。子どもたちは「やっぱり生き返った!」と大騒ぎです。「一回死んでしまったら、もう生き返らないの。これは別のハムスターなの」と説明しなければなりません。子どもたちはその説明に納得したようでしたが、動物の墓で、「ハムちゃんが生き返りますように!」「復活しますように!」と祈る姿が見られました。

エピソード②

ついこの間、二匹のハムスターが死んだばかりなのに、園児が新しく持ってきてくれたハムスターがまた死にました。休みの間に脱走し、トイレの便器の中で死んでいたのです。ハムスターの飼育方を見直し、今度は死なせないからどうすればよいかを子どもたちと話していたのに、小屋の入り口がきちんと閉まっているかどうかの確認を怠ったためにこういう事故が起きました。子どもたちにありのままを伝え、「もしこれから動物を飼う時は、事故が起らないように、入り口

を閉めなくちゃいけない」と話していました。話している間に先生が泣いてしまったので、子どもたちはなぐさめようと思っただけで、「また持ってきてあげようか」「また連れてくればいいよ」と言います。「そんなに簡単にはいかないんだ。新しいのがくればいいんじゃないんだ」と先生が伝えると、「生き物は死ぬから、もう飼わないことにしよう」と言っている子どももいました。

以上の二つのエピソードを読まれて皆さんはどのようにお感じになられたでしょうか。どうしてこんなに立て続けに死亡するのだろうかと驚かれた方もおられるかもしれませんが。このような飼育動物の死は、皆さんが考えておられるような「命の教育」につながるでしょうか。「命」の重さや尊さを教えるという目的とは逆の結果になってしまっているように感じます。

「生」と「死」は表裏一体ですから、生存中にその命が尊ばれていたならばその死は悼まれ、命を軽んじていればその死も取り立てて大きな意味を持ちません。ハムスターが生きている間に、もし先生や子ども

たちが軽んじた扱いをしていたとすると、その「死」に対する対応も軽んじたものになってしまいます。その反対に、ハムスターが生きている時に、尊んだ扱いをしていたなら、その「死」も尊く重いものになっていたはずですが。また、「生」と「死」は一連の流れです。生きている間の関わりが重要であり、これによって「死」に対する感受性が変化することは先に述べたとおりですが、「死」の部分だけを切り取って、お葬式をしたり、子どもたちにありきたりの言葉かけをしたりしても、すべて不自然で上辺だけの行為になってしまうことも強調したいと思います。「死」は悼むべきものだ、悼む際にはこのように行動するのだ、と形式を身につけさせたいとお考えの方はいらっしやらないと思います。「生」と「死」を一連の流れとして、生から老いへ、そしてその先にある死へと緩やかに変化する姿を労わりながら迎えた死であったとしたら、このエピソードの子どもたちの姿はどのようなものだったでしょうか。

ハムスターの死と人間の死を同等に論じることには不謹慎との誹りを受けるかもしれませんが、あえて言う